

新・世界洋上紀行

洗練のヨットスタイルを愉しむラグジュアリーな海の旅

第1回 Le Ponant(ル・ポナン)／前編

フレンチシップ「ル・ポナン」で巡る、フランス・コートダジュールから
スペイン・リゾート島周遊クルーズ

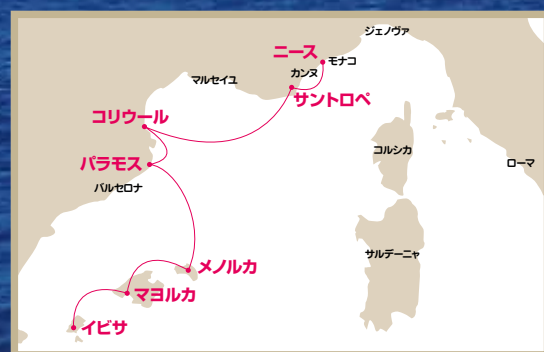
クルーズにはいくつかのスタイルがある。欧米のクルーズファン、とりわけパーソナルなサービスを求める人たちが最後にたどり着くクルーズのスタイルが「ヨットスタイル」と呼ばれるもの。ヨットスタイルとは、あたかも自身がそのヨットのオーナーであるかのようなプライベート感あふれるクルーズシップ。上質かつハイクラスな船旅でありながら、タキシードやドレスといったフォーマルの装いは不要な、もっとアウトドア、もっと海と風と空を満喫する船旅。この新連載では、これまで日本ではあまり知られていなかったハイクラスなスモールシップを中心に、世界の海を巡る旅を紹介しよう。

text: Masaaki Higashiyama

photo: Masaaki Higashiyama, Compagnie du Ponant

special thanks: Compagnie du Ponant,
Mercury Travel

<http://www.mercury-travel.com>





ニースの港にたつむ「ル・ポナン」。全長88m、全幅12m、総トン数1,443トン。船客定員はわずかに64名。フランスのエスプリ、「カンパニー・デュ・ポナン」を代表する、美しきスモールシップだ。

真のラグジュアリーは 小さな船にある

私が最初に紹介する船は、フランスの船会社カンパニー・デュ・ポナンに属する「ル・ポナン」。今や世界最大のクルーズ船が22万トン、約6,000名の船客を運ぶのに対し、ル・ポナンは総トン数1,400トン、全長88メートル、船客定員64名。クルーズ船としては最小の部類に入る。

日本ではとかく、大きい船=良い船と思われているが、それは違う。例えば、洋上の楽しみのひとつであるディナー。2回制としても一度に何千人の人に心のこもった美食を提供することなどそもそも不可能。それがたった64名の船客ならば、可能なのである。世界中に就航する数あるクルーズ船の中でも、ラグジュアリークラスと呼ばれる最高級船は大きくても定員300名、3万トン程度にサイズを抑えている。

8月15日

南仏コートダジュールは、バカンスシーズンの真っ只中。街も人も、きらびやかで華やか。夕刻、ニース港に佇むル・ポナンへ乗船。冷えたおしぼりとシャンパンが出迎えてくれる。大半の船客はフラ

ンス人だが、その他の国からのゲストへは、このクルーズを目一杯楽しんでもらおうと、フランス人船客以上の手厚いもてなしをしてくれる。

ル・ポナンは、どこの港に行っても、必ず地元の人や他のヨットオーナーが見に来る。絶対的にスタイルが美しい。ニースやモナコには、ル・ポナンと同様、いやそれ以上の大きさのプライベートヨットも留まっているが、ル・ポナンほど美しく上品な船はそう多くはない、と私は思う。大きさは同じでも、これ見よがしにヘリポートがあったり、派手なテンダーを何艇も搭載していたり……、



世界中からバカンス客を集める南仏、コートダジュール。温暖で美しい「紺碧の海岸」は、ピカソやマティス、コクトーなど、多くの芸術家や詩人に愛された場所。いまも各地に彼らのアトリエが残る。

品の良さという点ではル・ポナンはプライベートヨットにも決してひけを取らない。

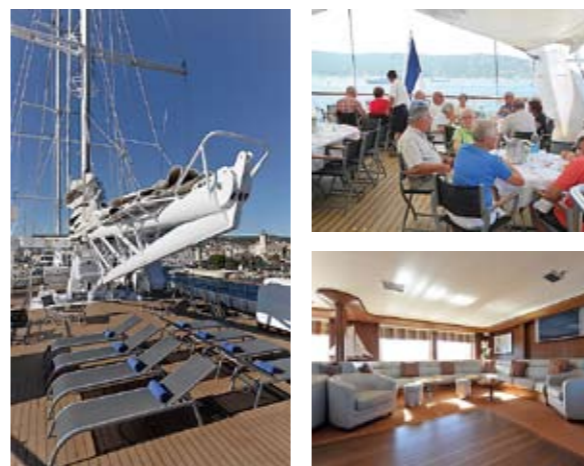
午後7時、ル・ポナンは静かに夕景のニースを出航する。コートダジュールの海岸線を東へ進路を取り、ビルフランシュからモナコ沖をセイリング、世界有数のリゾート地は見とれるほどに美しい。この日はちょうど、フランスの特別な祭日。カンヌ沖ではそれを祝っての花火に祝福され、ドラマティックにこの旅が始まった。

午後8時から始まる遅めのディナー、これがこの船の最大の売り。毎晩本格的なフレンチのフルコースディナーが堪能できる。そして昼と夜の食事時には当然、赤・白・ロゼのワインもあわせ

て振舞われる。私の今夜のディナーテーブルは、カナダ、ブラジル、そして日本からのゲストとご一緒。この普段出会うことのない人たちとの語らいが、一層豊かな気分させてくれる。国が違えばバカンスの過ごし方も全然違うが、それでもいつも思うのは、みな人生を存分に楽しんでいるということ。日本人も、もっと楽しんでもいいのではないだろうか。

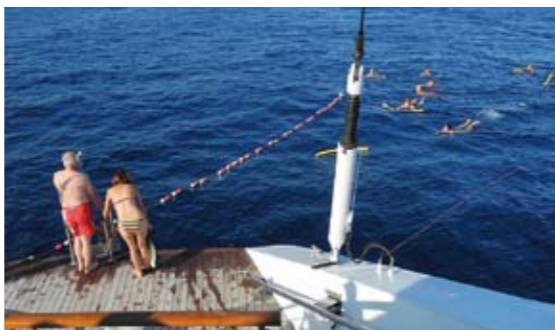
キャビンには、シャワー、トイレ完備。ベッドがやや低めで圧迫感がなく、部屋も広く感じる。

深夜、ル・ポナンは明日の寄港地サントロペに到着、アンカーを降ろす。おかげでいい眠りに着くことが出来た。



開放的な4デッキの船内に、白と青で品良くまとめられたキャビン。小さな船だが、ル・ポナンに乗った人は、必ずまたこの船に帰ってくる。

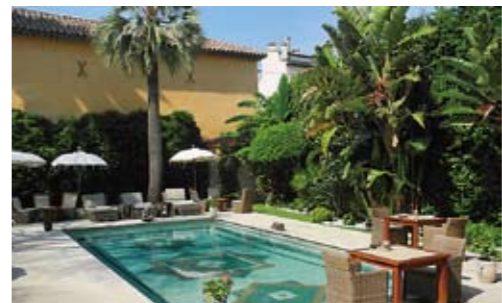




ル・ボナンにプールはない。泳ぎたければ船尾のマリーナから海にサブーン！ テンダーのソディアックに乗って、ル・ボナン自体の撮影会というアトラクションもある。



プライベートヨットが隙間なくマリーナを埋めるサントロベ。パパラッチのヘリコプターがヨットを追いまわしていた。街には高級車があふれ、ルレエシャトーに加盟する隠れ家ホテルや、C.ディオールのホテル。ここはまさに最上級のリゾート地。



8月16日

目が覚めると、キャビンの丸窓から強い光が差し込んでいた。海面がキラキラ光っている。今日も絶好のバカンス日和。ルームサービスの朝食を摂って、サントロベ観光へ。ル・ボナンの船尾にあるマリーナからゾディアックに乗り、サントロベのマリーナで降りる。ゾディアックは時折波を少しかぶり、ズボンが濡れたりするがそれもご愛嬌。

マリーナには、ル・ボナンと同じ、いやそれ以上の大きさのプライベートヨットが何艇も停泊している。サントロベは、小さいながらもどこか気品を感じる街。昔から著名な映画俳優や作家がバカンスに訪れる、最上級のリゾート地である。たしかに街にはフランスの高級ブランドが軒を連ね、クリスチャンディオールが経営するホテルや、ルレエシャトーに加盟する超隠れ家的なホテルがあったりと、通りを歩いているだけで、この街がただ者ではないことはすぐに感じ取れる。

昼過ぎにゾディアックで船に戻り、デッキで冷えたロゼと

ビュッフェスタイルのランチ。どこかピクニックのような気分。疾走するモーターヨットを上空から追尾するヘリコプターに、フランスのご婦人が「あれは、きっとパパラッチが誰かを追ってるのよ」と微笑んだ。

夕刻といってもまだ明るい午後6時、船尾のマリーナから海へ飛び込む。船のプールでもなく、砂浜で泳ぐのでもなく。紺碧のフレンチウォーターに身を委ね、仰向けになってみる。日本とは違う空の色、雲の形をじっと見つめ、耳まで海につけてしまえば静寂の不思議な空間。その瞬間、本物のバカンスに少し触れた感じがした。

8月17日

ル・ボナンは、スペインとの国境近くにあるコリウールに到着。ここはフランス人でもあまり知らないほどの小さな街。そのためか、船客の大半は午前中は何をするでもなく、デッキで寝そべって日光浴をしたり、本を読んだり、思い思いの時間を過ごしてい

る。私も真似てデッキで日光浴していると、大小様々なヨットがル・ボナンに近づいてくる。どうやらみな、この船が気になるらしい。

たまに目が合うと一様に、「Is this yacht yours?」と聞いてくる。それに「Yes」と答えると、一様に凄く驚いたようなオーバーアクションを返してくる。たしかにこの船は客船のようなファンネルを掲げた煙突もなく、たくさんの船客がいるわけでもないの、個人所有のヨットにも見える。

毎夕、デッキではカクテルパーティが行われる。今日のテーマはモヒート。

ところでフランス人は、英語が喋れるけれどプライドが高くて話さないのか、それとも英語が喋れないのか？ ポナンの船に乗るといつも疑問が湧く。それを何人かの人に尋ねてみたが、どうも後者の人が多いらしい。

そういう私も、英語なら片言でもコミュニケーションが取れる。



ガストロノミックシップ、「食通の船」という異名を持つポナン。船客64名だからこそ提供できるフルコースのフレンチディナー。洋上でこの食事レベルは、まさに奇跡だ。感動のディナーがいま始まる。

しかしフランス語はさっぱり。そんなコミュニケーションのもどかしさはあるのだが、それでもこの小さな船で何日も一緒に過ごしていると、だんだんと友達も増えてくる。そしていつか、片言の英語と身振り手振りで立派にコミュニケーションが出来るようになっていく。私が彼らの日ごろのライフスタイルなどを聞いてみたいと思っている以上に、彼らフランス人も、遠く日本から来た私に興味深々なのである。

大型船で何千人も船客が乗っていてもあまり言葉を交わすことはないが、小さな船ほど人と人の距離感が近く、いつしか友達になっていることが多い。英語で言うなら Intimate (親密な) という言葉が言い得ている気がする。

ディナーの後、バーに腰掛ける。バーテンダーはフィリピン人。同じアジアということでこれまた違った親近感をお互い感じ、話も盛り上がる。今まで渡り歩いた船会社のこと、フィリピンの家族のことなど、いろいろと語ってくれた。半年以上は休みなしで働き続けるのが当たり前の職業、そんな彼らのハードワークが、優雅なクルーズライフを支えている。

明日は国境を越え、スペインのパラモスへ入港する……。 **P.B.**

Profile 東山真明

海と船の旅をこよなく愛する、海外クルーズエージェント。大型客船よりも、プライベート感ある上質な「ヨットスタイル」のクルーズにこだわり、国内で小型船クルーズを取り扱う4社による「スモールシップアライアンス」を設立、その啓蒙に励む。マーキュリートラベル代表。

■マーキュリートラベル TEL: 045-664-4268
http://www.mercury-travel.com